

# 目次

はじめに	6
<b>第1章 私塾を開設した理由</b>	
若い人に伝えたい「本物の歯科医院」	10
患者が増えるだけでは終われない、これからの歯科医院	10
これからの歯科医院は「地域の大学病院」となれ	17
幸せな歯科医師を一人でも多く育てたい	21
<b>第2章 私の履歴書</b>	
開業までの私の道のり	30
私の生い立ち	30
歯学部時代	33
勤務医時代	36
<b>第3章 院長の本当の仕事って何だろう</b>	
紆余曲折を経てようやく見えてきたこと	40
院長なら誰もが直面する現実	40
まあまああの経営がゴール！と思っていた自分	45
開業は人生で一度だけだからこそ	47
技術があればスタッフも患者さんもついてくるという幻想	52
患者さんに価値を伝えるために私がとった行動とは	56
<b>第4章 あなたは開業したいですか、それとも…</b>	
開業してよかったこと	62
自分の能力に投資できる喜び	62
あなたは何歳で開業しますか	72
チームを支えるナンバー2という生き方もある	76

## 第5章 開業する前に知っておいてほしいこと

最低限の技術水準とは	84
1日30人診る力があるか?	84
技術を身につけるには経験がいる	87
開業するなら勤務先を選べ	91
開業するとスタッフとの関係は一転する	92
スタッフは自分の鏡そのもの、スタッフ教育に手を抜くなかれ	94
採用後のスタッフ教育は「どんな人を採用するか」より大事	97
採用してはならないのはこんな人	99
「忙しさ」はありがたい	102
患者さんはすぐに集まる? 2つの勘違い	105

## 第6章 これは誰にも教えてもらえないこと

開業後必ず受けることになる新規個別指導	112
新規個別指導を受けるまで	112

## 第7章 これから学び始める若い歯科医師の先生へ

新規個別指導のその後	118
保険診療のルールを学べ	120
歯科医師会との付き合いかた	122
銀行との付き合いかた	131
成功し続ける人が必ずやっていること	140
「早起き」と「掃除」	140
診療外のことこそ力を注ぐ	146
人のために学ぶ 自分を磨く就職するときを考えておきたいこと	150
勤務医としての就職先の見つけ方	151
技術の研鑽には時期がある	155
「志をもつ」という意味	158

あとがき	165
------	-----

私が歯科医師免許をとったのは27歳。それからあっという間に20年が経ちました。もう数年もすれば50歳を迎えます。

20年も歯科医師を一生懸命やっていたら、その間に身につけた知識と技術は、それなりのものになってきたのかもしれない。

手前みそではありますが、やっている歯科治療も他にはないレベルのものも一つや二つではなくなってきましたし、多くの見学者が訪れるわけですから、ますますのものができているのかもしれない。

学術発表や講演の機会だつて増えました。

しかし、私は人に認められることや、なにかしらの地位がほしいわけではありません。

若い時にはそんな時期もありましたが、今はなんというか、自分がこの年齢にふさわしい、他の何かを求めていく姿勢があってもよいのではないかと思うようになったのです。

つい最近までは、それがいったい何であるのかはわかりませんでした。ここ数年、何か心の中もやもやするもの、満たされないものがあり、それは何かを考え尽くしました。

その結果、私の中に若い次の世代の歯科医師を心の底から育ててみたいという気持ちが彷彿してきたのです。もしかしたら、それが私にとって生涯で成し遂げたいことの一つではないか、とも思えてきました。ただ単に普通の歯科医師を育てたいのではなく、「立派な歯科医師」と呼べるような人を育てたいと思うようになったのです。

「立派な歯科医師」とは、優れた診断能力を持ち、治療ができるだけではなく、人の心をよく理解でき、自分のチームを愛し、経営にも真剣に考えることのできる歯科医師のことです。もっと具体的に言うと、他者に対し謙虚な態度と敬意を払う

ことを忘れない礼儀正しい歯科医師です。

私は数知れず、一流と呼ばれる歯科医師にたくさん出会ってきました。

一流である人は必ずと言っていいほど礼儀正しく、謙虚であり、どんな人にも敬意を払います。それに加えて、何とも言えないオーラが出ています。そんな方達は、どんな形であれ後進を育てています。私もそんな領域に行きたいと思っています。

例えば、同級生が集まると「彼は偉くなつたな」と人の出世話が出ます。この偉いは、社会的な地位が高いことを示しているわけですが、本当に偉いとは「立派な人」であることではないかと、私は思うのです。そんな立派な歯科医師を、私は一人でも多く日本の将来のために輩出できる歯科医院を創り上げることができたらと考えています。

稚拙な文章ではありますが、最後まで読んでいただけたら幸いに存じます。

鶴田 博文